携帯電話コミュニケーションを考えるための考察

—非連続的空間の拡大と可視化される人間関係—

藤　本　一　男*

概　要

我々は、携帯でコミュニケーションをとる子ども達の現状に不安を感じている。この不安を表現するものとして、携帯依存、ゲーム脳、仮想と現実の区別がつかない、など、さまざまな解釈がおこなわれてきた。しかし、ここ数年、急激な普及をすすめている携帯電話の利用状況を学生達の使い方からみていくと、決して、病理的なものがあるようには思えない。依存といっても薬物への依存のように、社会がなりたたなくなるようなものではなく、自動車や鉄道への依存と、同じようなものといっても差し支えない。また、仮想と現実の取り違えなどもない。にもかかわらず、心配が払拭されないのは、携帯電話やネットが、自我のありように影響を与えると直感されており、正体が見えないからである。

そこで、本論では、携帯電話に代表される今日の情報通信機器によるコミュニケーションが、どのような関係の変容をもたらすのかを考察するために、この関係の成り立つ前提の変化に注目する。その上で、その変化（距離的連続性による空間の分節化がなりたたない状況）を概観し、考える視点を整理していく。

キーワード：携帯　メール　ケータイ　リアリティ　情報化　自我　バトルロワイヤル　RFID

1　はじめに

若者、特に、児童、生徒のIT[1]との距離のとり方が問題になっている。最近報じられる子供が巻き込まれた犯罪に携帯電話が関係していたり、また、犯意を理解しがたい犯罪がインターネット上の予告をともなっておこなわれていたりすることが影響している。また、ネット上での詐欺行為が横行し、児童、生徒が犯罪に直接巻き込まれる危険性が増大していることもその背景にある[2]。

このような社会的不安定要素の背後にITが関与しているのではないかといわれることが多いが、それは、インターネット利用率、携帯電話利用率の急激な増大をみるなら、あらゆる場面に、ITが背後に存在しているとさえ言えそうな状況がある。

ITを用いたコミュニケーションの拡大が余りに急激であったために、日常的にIT機器、インターネットを活用している人でさえ、戸惑いを感じる場面は多い。そこに現われる不

*作新学院大学人間文化学部　助教授

安につけこむ形で各事件を「理解」するために、ITを悪者にする安易な解釈の存在も指摘されている（香山・森 2004）。確かに、私達は、悪者が見つかれば取り敢えずは安心できるのだ。

携帯電話は、この悪者に仕立て上げられることが多い。しかし、栃木（今市）での事件のあと、学校は、制限付きではあるが、通学路での安全確保のために、携帯電話を持たせるという対策を行った「今市市教委携帯電話持参認める」（『下野新聞』,2005.12.8朝刊）。このようなITによる防犯対策は、ますます増えていく傾向にある[3)]

このような展開をみていくと携帯電話は必要だ、ということを前提に、使い方の問題を考えればいいようにも思えてくる。携帯電話利用のマナーは、ある程度社会的コンセンサスが形成されたと思われるが、ネットを安全に利用するルール化、安全教育は、まだ、手探り状態である。

確かに、ITになんからかの防犯機能を期待することも可能かもしれない。しかし、それは、どれだけ実効性があるのか不明であるし、防犯用に携帯電話を所持していたながら犯罪にあった場合に、損害賠償請求に応じるつもりなど携帯サービス会社、機器メーカーにあるはずもない。また、もし、こうした防犯機能があるとしても、携帯コミュニケーションがつくりだす関係への違和感、不安が解消されるわけではない。

本稿は、このような状況を踏まえて、携帯電話に代表される情報通信機器によって、我々のコミュニケーションの変化を、ITが変えてしまった関係性に注目して考えていく。

2　ITによる距離の消失は、社会的枠の無効化、時間の変容をもたらした

2.1 時間、空間の変化

情報技術は社会を変える。このフレーズは、1990年代中葉以降のインターネットの普及によって誰にもで確認できる変化として経験されている。

変化の第一ステップは、インターネットの普及であった（1995年～）。ここでは、パソコンの普及と「世界規模のネットワーク」の利用が変化の中心であった。変化の第二ステップは、1999年のNTTドコモによるiモード投入を期に拡大した、モバイル・コミュニケーションの普及である。

第一ステップでは、インターネットを利用するためには、（インターネット接続された）パソコンの前に座らなくてはならなかった。ノートパソコンもあったとはいえ、電子メールを交換するためには、パソコンを電話回線に接続する、という操作を必要としている。携帯電話によるインターネット（メール）の利用は、こうした通信のための作業を不要なものにした。なによりも、インターネットを使える場所（パソコンが設置されている場所）

にいく必要がなくなった。携帯メールによって、電子メールは、パソコンではなく利用者に着信するようになったのである[4)]。

インターネットは、空間的な制約を克服した。ネットにつながっている相手であれば、世界中を対象にメッセージの交換ができる。例えば、90年代の中葉以降、社内情報システムのインターネット対応が進行したが、この過程で、まず、社外が社内化していった。つまり、外部にあるリソースをあたかも内部にあるかのようにして扱うことが可能になったのである。そして、同時に、この関係は必然的に、社内を社外化していった。業務に関係のない電子メールであっても、社内の人間に届けられることになる。ここで起こった変化は、「社外の社内化」「社内の社外化」と呼ばれたが[5)]、ここに「会社」という枠が無効化される兆候を確認することができる。なお、ビジネス活動においては、この壁の無効化を、業務の効率化、また、顧客との関係の緊密化のモメントとして積極的に位置づける。もちろん、この壁の無効化は、同時に、社内資源である情報システムの私用、つまり、仕事に関係ないWebの閲覧や私用メール問題を引き起こしていく。

企業内で起こった変化はどこでも起こる。それは、インターネット、そして、携帯電話の普及によって、全社会に拡大していった。

小中学、高校では、生徒の携帯電話の携帯所持を規制しているところが多いが、大学では、携帯電話の利用は学生の意識に委ねられている。そのために大学の教室では「静かな私語」が蔓延することも起こる。それを注意するか否かは、講義を担当している教師の判断ということになるが、学生達は、隣にいない友人と教室の壁を越えて会話を行っている。ここでも、教室の壁は見えなくなっている。

家族の食事の最中でも、子供達は、携帯を身近な所に置き、着信すれば、誰からのメッセージであるかを確認する。テレビを観ている時にも同様である。家庭の食卓、テレビの前の団欒、を成立させていた空間的な枠は、携帯メールによって無効になっている。

こうした変化は、インターネット利用がパソコンに限定されていた段階では、自我の拡散として観念されてはいたが、現実の空間の再構成としては訪れていなかった。今みたような変化は、携帯電話という装置を用いてインターネット利用が可能になったところから始まる。つまり、身体が直接ネットに接続されることによって、いわゆる仮想空間が、現実空間の一部に「虚構」として顔を出しているという関係ではなく、ネットの関係を不可欠の要素として、我々が行為する現実空間が再構成されたのである[6)]。

もちろん、近代社会は、個人を中心とした同心円的な人間関係の重層的関係を解体してきた。PLバーガーは、社会統制を説明するのに、個人を中心に置き、一番親密な層を一番近いところにおき、その周囲に機能的領域（経済関係）、最後に、法的、暴力的な統制（国家）を同心円的に配置することで、社会統制、すなわち、社会のリアリティを説明している（バーガー 1962=1995:109-117）。

都市の登場、マスメディアによるコミュニケーションの変容、など、社会学が対象にしてきたものは、すべて、こうした人間の関係の変容に関係している。近代が産み出したさまざまな装置が、伝統的には自明であった関係を無効にし、新たな関係を登場させてきた。社会が意識されるのも、この変化故である。確かに、近代的な関係は、身近な関係のすぐ隣に、国家が登場する関係をももたらしてきていはいた。だが、携帯電話/インターネットは、こうした境界をいっきに突き崩してしまったのだ。こうした関係の変化は、ITが突然引き起こしたものではない。とはいえ、近代が生み出した変化が、ITによって、劇的に推し進められたことは確かである。

こうして、子供の社会化を考える際には、このような関係の変化を考慮する必要が生じている。振り返ってみれば、テレビの登場と普及、（個室の普及と平行した）テレビゲームの普及など、新しい電子メディアは、常に、従来の関係性を無効にする機能を果たしていることがわかるし、それらは、子供への悪影響を与えるものとして問題にされてきた。

母親との親密な関係、エロス的関係の中で核を形成される自我は、その後、身近な人達、友人たちとの相互行為のつみかさねのなかで、成長していく。そして、自分のまわりの具体的に知っている人達以外にも人々がいて、その人達が社会（世間）というものを体現していることを知る。そうした存在を自覚することと、大人になることは一体である（一般化された他者の態度取得）。

そして、この過程は、身近な存在との日々の営みのなかで展開する。ITが介在しなければ、自然的な距離は、心理的、関係性の距離におおよそ対応している。ところが、ITは、こうした空間的比例関係を変化させる[7]。

関係の空間的非連続性、これが、今日私達が直面している不安の背景である。家族でテレビ・ドラマをみている。そこに、携帯メールが入る。子供は、携帯メールに返事を書く。その時点で、その子供は、親といっしょにテレビをみているわけではない。まったく見ていないわけではないが、心ここに在らず、である。まったくそこにないわけでもないが、リアルタイムでメッセージの交換を行うということは、目には見えないが、別の実在と関係を結んでいる子供がそこにいる。ここに上げた、子供、親、は、逆転してもいいし、妻、夫をあてはめてもいい。携帯電話を傍らにおくかぎり、その場は、「ケータイ」に登録された相手を中心に、関係のリンクが張り巡らされているということなのである。

そして、この通信相手は、（ゲームなどをめぐってさんざん言われた）仮想空間などではなく、生身の友人なのである。

意識は、空間的制約にとらわれない。目の前では退屈な講義が続いていても、気持ちは、そのあとのデートの相手を思っている、ということは可能である。心ここに在らず、というのは心、意識がとりうる基本的な状態であろう。しかし、その対象が、独自の実在で、そことの相互行為が可能になることで、意識の自在性を越えて、対象としてのリアリティ

をそこに実現してしまったのである。

2.2 転倒する基準リアリティ

私達は、リアリティという時、大きくふたつのリアリティを使い分けている。一つは、「対象のリアリテイ」と呼べるもので、感覚器によって形成される外界のホントらしさである。映画の映像を見るときには、それは、スクリーンの上の光の点でしかないのだが、ホンモノのように見える。音楽が聞こえる時、それは、電気信号が紙を振動させ、それが空気を振動させているものでしかないのだが、ホンモノの音楽として響いている。マルチメディア技術が追求しているのは、基本的にこの「対象のリアリティ」と言っていいだろう。

こうした「対象のリアリティ」とは異なったリアリティに「関係のリアリティ」と呼べるものがある。これは、相手との関係が確かなものである、という時に感じるリアリティである。直接に相手の表情は見えないものの、短い言葉のメッセージが相手の存在を確かなものと実感させてくれるものがある。そうしたリアリティは、相手の写真があったり、もしくは、ホンモノらしく動いている画像の持つリアリティとは別のものである。

この関係のリアリティは、人間がシンボルを操る存在であること（Cassirer）に根拠をもっている。カッシーラーは、人間はシンボル界を経由してしか外界を経験できないという（Cassirer 1944=1997:63-64）。つまり、関係のリアリティの要素をもたない対象のリアリティは、人間にとってはありえないことになる。そのために、我々は、世界のあらゆる事象に意味を見出す。この点は踏まえた上で、本稿の展開においては、「対象のリアリティ」と「関係のリアリティ」に機械的に区分する。押さえておきたいのは、対象のリアリティをいくら深化させても、関係のリアリティにはたどり着かないという点である。

文字中心の電子メールは、マルチメディアをあつかえるWebが普及する初期段階で、古い情報伝達手段といわれたことがある。しかし、メールがpush型であること（Webはpull型、つまり、相手が訪問してくれなければ情報を伝えることができな）もあり、そのような見解は消えていく。文字は、適当なテンポでやりとりされることで、相手の存在を確かなものに実感させる媒体なのである。

つまり、メールの応答関係は、相手との関係をシンボリックに表現している[8)]。

こうして、情報技術は、応答しなくてはいけない対象をを我々の「周囲」に増やしている。かつては、空間的に隔たっていれば、即時の応答を求められる関係は、そもそも成立しなかった。つまり、挨拶をされたら挨拶を返すのが礼儀である、という関係は、顔をあわせなければ発生しなかったのである。ところが、携帯電話に代表される情報機器は、この空間的距離がもたらす関係性の枠、区分を無効にしてしまった。

こうした関係の空間的非連続性が出現するまでは、関係は空間的分節化に従属していた。

距離や物理的な壁が関係を規定していた。そのために、いかに、意識が関係のリアリティを可能にするといっても、それは、仮想のリアリティでしかありえなかった。そのため、真にリアルなものとは、今手で触れるもの、手を伸ばせばさわれるそこにある/いるもの、であり、対象のリアリティが基本的リアリティであった。ところが、そこに、関係のリアリティが、空間的分節化を無効にして混入してきたのが、今日のリアリティの状況である。こうして、関係のリアリティが、目の前の対象のリアリティを上回る実在として、たち現らわれるのである。

2.3 即答をもとめる携帯メール

パソコンで電子メールを始めた世代としては、電子メールは、手紙の文字が電子化したもの、という意識でいた。つまり、まずメッセージを書かれた紙の文書を郵便で送る、という通信の形式があり、それが、FAXで電子的に相手に送るということが可能になり、更に、電子メールで電子文字を使って、メッセージの交換が出来るようになった、と考えるわけである。

ところが、携帯メールから電子メールを経験した世代は、そうは捉えない。まず、電話とは、携帯電話であり、その声が文字になったものが、携帯メールなのである。そう考えると、以下の違いが理解できる。

90年代初頭、企業は、電子メールを導入していった。そこでのうたい文句は、「電話は仕事に暴力的に割り込んでくるが、電子メールは受信者の都合で返事を書くことができる。仕事を中断されることはない。故に、電子メールの導入は、生産性を向上する。」というものであった。確かに、電子メールを読めるパソコンを使わないことには、電子メールを読むことができなかったのは確かである。だから、相手からすぐに返事がこなくても、(これは、仕事であろうとプライベートであろうと)「そういうこともある」と誰もが理解していた[10)]。

ところが、携帯メールの場合には、その名の通り常時「携帯」が前提であるから、返事がこないのは「読んでいないから」ではなく、なんらかの事情があって、返事をできない/しない、と見做されることになる。加えて、携帯メールが伝えるのは、文字が電子文字化したメッセージではなかった。「声」が電子文字化したものと見做されている。つまり、姿は見えないものの、すれ違いざまに、「やあ！」と送られた挨拶のようなメッセージなのである。だから、それに（可能な限り速やかに）返事をしないということは、相手の挨拶を無視する失礼な行為にあたる。こうしたプレッシャーも働くことになる。

かくして、携帯メールに対しては、速やかに返信すべし、というルールがたち現らわれていく。もちろん、仕事中のパソコンに着信するメールにもしかり、である。重要なメッセージ（仕事関係はもちろん、プライベートでも）があるかもしれないという時に、未知

の着信を無視するには、メールを読めない状態にしておくしか手はない。

電子メールならば、受け手が主導権をもって、対処できる、などということは、想像もできないことになってしまった。

このように、携帯メールは、身体デバイスとしての携帯電話を媒介にするために、いわゆるパソコンメールとは異なった性格を発展させていく。技術的には、どちらも電子メールである。だが、コミュニケーション・メディアとしては別のものとして考えなくてはならない。

3 自我形成と携帯メール

さて、携帯メール・コミュニケーションは、以上のような性格を有している。そこで、この装置と自我、コミュニケーションとの関係を考察しておきたい。ここで検討する要素は、以下の通りである。

第一は、境界が無効化するということにともなって、親密な関係、機能的関係、抽象的関係の、同心円モデルが崩れているということ。これは、このモデルで自我を形成した世代と、これから自我を形成する世代との間に相手の理解ができないという問題をつきつけることになる。第二は、携帯メール、インターネットといった電子メディア・コミュニケーションの基礎にある電子文字の性格に関係する。

まず、第一の点から検討していこう。

自我形成を終えたいわゆる大人が携帯電話、携帯メールを使う場合、社会が前提としていたそれまでの枠の消失は、周囲の人との心理的な葛藤を呼び起こすことになる。ここで論じられているのが、いわゆるマナー問題である。マナー問題は、従来からの枠を、それがいかに無効化していようと、やはりそれが今もあるものとして行為しあいましょう、という呼びかけになっている。そこでは、マナーを理解できる程度には大人であることが想定されている。

しかし、この程度に大人になる途上の子供の場合、どのように考えたらいいのだろうか。我々が、倫理感覚、マナーの基礎を身につけるのは、理屈によってではない。有無を言わさぬ強制によって「かくあるべし」というメッセージを周囲から受けることによってである。その「かくあるべし」という命令の持つ強制力、不動性は、成長とともに、綻びが見えるようになるのであるが、携帯電話コミュニケーションが前提の場では、この有無を言わさぬ場を境界、境目は、有無を言わさぬものとして提示しようがない。今の児童は、こういう条件のもとで、自宅、地域、学校、教室、などの空間的な分節構造を内面化することになる。携帯がなかった時には、教室は教室でしかなかったのであるが、今は、(携帯を使えばではあるが)、隣の教室はもちろん、自宅、ともかつての有無をいわさぬ自明の境界はない。スイッチをいれれば軽がると越えられる一つの枠組みに相対化してしまって

いる。もちろん、教室の壁がなくなってしまったわけではない。しかし、境界、枠組みとしての唯一性を失ってしまっており、その唯一性は、子ども達の意思によって維持されなければならない対象になってしまっている。

これに、第二の点、電子文字の特性の問題が加わる。

前田愛は、「音読から黙読へ」（前田 1973）の中で、文字が今日のように一人で黙読されるようになる前は、声を記録しておくメディアであったことにふれている。こうした転換期を経て、文字は、今日、我々にとって自明であるような一人で書物に対面する、という享受形式として定着した。前田は、リースマンを援用しながら、こうした孤独な読者は、清教徒の読書習慣によってもたらされたとも述べている（前田 1973:186）。こうして、文字との孤独な対面は近代的な自我の形成と不可分のものであるわけだが、電子文字は、こうした伝統的文字の役割を同じ形では継承しない。

まず、電子文字は、うつろう。書かれたり印刷されて紙の上に定位した文字とは異なり、電子文字は、スイッチを切れば消えるはかないものでしかない。

もちろん、電子文字に伝統的文字の機能すべてを代替しなくてはならないわけではない。しかし、人間の利用可能な時間は、有限であり、インターネットの普及にともなって、文字に親しむ時間が長くなってきたとはいえ、その増加分は、電子文字であり、相対的には、伝統的文字を経験する時間は減少している。

加えて、一人で思考する時間も、携帯メールの割り込みによって、阻害されている。総じて、文字といえば、電子文字という状況になっているといってもいい。

こうした環境で形成される自我は、我々が前提にしている自我の性格とは異なったものになることは前提にしておかなくてはならない（藤本 2004）。

4 可視化される相手との関係

携帯電話、携帯メールによる境界の無効化を以上検討してきた。加えて、人間関係が可視化される側面について検討しておきたい。

電子メディアを利用することによって、学校、家庭、教室、といった空間的な境界が、無効化される一方で、他方、今まで目に見えなかったものが見えるのようになってくる（「ITによる可視化」）。

今や多くの人が、携帯でつながっている。そのために、携帯のアドレス帳の整理は、人間関係の整理でもある。そして、関係を維持する努力は、対面関係にない状況でもはらわなくてはならない。対面状況にある相手は、その存在が、自分が大切だとおもっている度合を越えて重視することを求めている。逆に、非対面状態にある人との関係は、相手を重要だと思っている意識の方が主要になる。メモリは、中間の存在を形作る。つまり、対面

状況ではないにもかかわらず、重視する対象が、アドレス帳への登録データになる。このアドレス帳のデータは、自分と直接セッションをはることができる対象である以上、準対面的状況をうみだしているといえるだろう。

携帯のような情報通信機器がない状況では、ある人との関係を気遣うのは、対面で接する状況にある時だけでよかった。つまり、学校で友人たちと一緒にいる状況が終わり、「じゃあ、また明日ね」となれば、基本的に別の空間を生きていることができた。しかし、すでにみたように、このような空間の区分は、無効化されている。メールは、一人でいるときにも容赦なく飛んでくる。自分が出したメールに返事がこないときには、なにか事情があって、返事ができないのだろうと、想像することも可能だが、メールをもらった時には、よほどの事情がなければ返信は行われる。

つまり、携帯によってつながれている子供達は、降りることを許されないある種のゲームに投入されているようなものなのだ。もちろん、降りることもできる。大学生くらいになれば、「私は返信、遅くなること多いけど、よろしくね」という立ち振る舞いも可能なようだ。しかし、自我形成期の子供たちの場合、これは、相当なリスクをはらむ。ある中学校の先生は、子供達が前提にしているルールから自覚的にはずれると、イジメという制裁がまっているのです、とこの「降りる」困難を説明してくれた。

降りる（自分のペースを貫く）時には、イジメ（という制裁）がまっているかもしれない、という状況は、『バトルロワイヤル』状況と呼ぶこともできよう。

映画化されたときには、国会での議論もあった作品だが、「直接の殺し合い」ではないものの、携帯をめぐった相互関係の作られ方を表現するには、ぴったりくる。この小説では中学生達の首につけられたのは爆発する首輪だが、現実の中学生達は、携帯電話をこの首輪よろしく気にしていなくてはならない。

ここで、子供達がみている人間の関係は、おそらく非常に脆弱なものに見えるはずだ。今の大人は、人間の関係が脆弱なことを、もちろん知っている。しかし、その関係は、物理的なものではなかったがゆえに、さまざまな解釈が可能であり、あるときは、その脆弱性に目をつぶることも可能であった。だが、関係が、メモリ上のbitになってしまったとしたらどうだろうか。そこでは人間の関係は、bit上のオンとオフに置き換えられてしまう。自らの意識を離れ、自分の外部に、客観的に確認できる形で関係が表現されている。

もちろん、ここでいうbit上のオンとオフへの置き換えは、人間関係の無機質化を一方的に意味するわけではない。今は、まだ、その逆であろう。bitのオン、オフに、人間関係の意味付与を強烈に行う行為が行われているとみるべだ。子ども達は、ゲームのよう「仮想世界」にふりまわされているのではない。そこには、友人関係が、片時も忘れることを許さぬものとして、存在しているのだ。

こうして、一人になることが難しい環境が日々構築されていく。

5 枠を自分で作る能力

冒頭で整理したように、情報技術が可能にした利便性は、従来の枠の無効化に基礎をおいている。であるからこそ、当然にも、こうした枠を前提にしてなりたっていた社会関係がおおきく揺らぐことになる。

私達は、引き返すことはできない。このまま進むしかないのだが、なにが起こっているのかについては、可能な限り冷静な観察が必要になる。

携帯電話を手にしてしまった今日、それ以前の人間関係のあり方、境界、枠組みなどがどのように変容しているのかを検討してきた。これらの変容は、大きな変化をもたらすが、その方向は、社会を形成することを可能にした変化でなければならない。コミュニケーションという領域についてだけみるならば、電子文字を使いこなす能力を可能にする、文字の運用能力、そして、その文字の運用能力を支える声の運用能力の養成が求められている。なぜならば、声こそが、コミュニケーションの基本原理である相手の役割取得の能力を形成する契機を与えるからである。

5.1 電子文字を使いこなす基礎力としての声と文字の運用能力が必要

電子文字という声の要素と文字の要素を合わせ持った「文字」を扱うには、声、文字の両方の特性を踏まえて運用することが求めらる。これは、ネット上での掲示板の書きこみの注意事項に直結する。

声で喧嘩をすると、どんどん激昂することがある。「売り言葉に買い言葉」という諺/警句を知っているので、どこかでブレーキをかけることができる。また、「高揚して書いた手紙は、一晩寝かせろ」ということを念頭においていれば、怒りにまかせて書いた手紙や、恋文を、その日のうちに投函して、とりかえしのつかないことになることは、さけることができる。

しかし、電子文字での喧嘩は、声的にどんどん激昂する。そして声のように、その場で消えてなくなることはなく、文字として、ずっと残ってしまう。そこでは、一晩寝かすという知恵は働きようもない。(藤本一男「「電子メディアが憎悪増幅　「声」のコミュニケーション重視を」『毎日新聞』2004.8.4 栃木版)

加えて、電子文字の声的な要素は、情動を表現する要素を強く持つ。書き言葉の場合には、上に述べたように、一度書いたら取り消しができないという性格故に、極端に感情的な表現に文字を用いることを抑止する使用（そしてマナー）が発達してきた。しかし、電子文字は、文字として意識されている限りは、そのような使用方法が適用されるものの、逆に、情動表現の流布を拡大している傾向がある。ネット上の掲示板でのフレーミングは、従来の文字規範でみるならば、抑止すべき現象であるが、視点を変えてみると、非対面関

係にあるものどうしが、感情のぶつかりあいの会話（罵りあい）を実現しているという見方もできる。活字が理性を体現しているすれば、電子文字は、文字には不可能なレベルで情動を体現する。

電子メディア、電子文字のこうした情動に訴える側面はテレビの登場以降、常に問題とされてきた。そこで、こうした情動的側面が過度に強調されてしまう傾向に対して、理性を対置する論調があらわれてくる。

だが、文字は、先に確認したように、近代的個人すなわち、共同体から距離をおきながら自己を反省する自我に対応しているのであって、ここに解決の鍵がすべて存在しているわけではない。ネット上でのコミュニケーションで問題となっているのは、単に情動に対置する理性の欠如だけではなく、ネットが実現した共同性の可能性のなかでの理性の在り方だからだ。

その意味では、コミュニケーションの基礎にある、他者の役割取得の能力をこそ、第一に養成し、それを基礎に、文字コミュニケーション、そして、声的要素と文字的要素をあわせもって「電子文字」の運用能力を鍛えていくべきなのだ[12)]。

5.2 枠を形成できるか

これらの電子文字の使いこなしは、対面コミュニケーション教育、文字運用教育によって展望されると思われるが、問題は、再構成されてしまった枠である。

子ども達に、この枠を無効にするデバイスを与えないという選択肢も考えられるが、社会全体が、手放さないものを、いつまでも子ども達に与えないというのがどれだけ現実的だろうか。もし、それが可能であったとしても、子どもは成長する過程で、周囲の大人の空間感覚を取得し内面化する以上、周囲の大人がどれだけ分節化能力を持つかが重要になってくる。

ただ、私が危惧するのは、ここで先行して形成される空間の分節能力が、どれだけ、人間関係の対称性を意識したものになるのあろうか、という点である。情報とは情報処理される客体である。主体は、情報処理する側にある。つまり、あらゆる情報は客体にしかなりえない。ここが人間のコミュニケーションと機械のコミュニケーションの根本的な相違点である。機械が媒介された場合、いかに双方向であっても、そこでは、擬似的な対称性しか実現しない。つまり、お互いに、相手を客体としあう関係をつくることによってしか対等性を保証できないとういことである。人間のコミュニケーションは、お互いに相手を自分の中に取り込むことによって可能になっている。このことが、社会を成り立たせている原理である以上、子ども達に取得させなくはならないもっとも根本的な能力が、他者の態度を取得することである。機械に媒介された関係をコミュニケーションと呼んでいけないのだ。

<声>の教育が重要なのは、これがここで述べた二つの要素、電子文字を使いこなす基礎力の形成と空間的分節化の能力を形成するの土台になるからである。

■注

1）総務省の情報通信白書(http://www.johotsusintokei.soumu.go.jp/whitepaper/ja/h17/)は、平成17年版から、ITではなく、ICTという用語を使用している。これは、情報通信技術-Information Communication Techinology-の略号として用いられている。確かに、今日のコンピュータとネットワークの利用形態が、情報の処理ではなく、コミュニケーションに比重がうつっているのは確かであるが、それを表現するのに、Cをいれることの積極性は見出せない。それは、情報技術を媒介にしたコミュニケーションでは、いかに双方向といえども、相互対象化という擬制でしかなく、コミュニケーションの原点である、相手の役割取得を可能にする対称性を実現しようがないからである。そのため、情報技術を媒介にしたコミュニケーションを表すに際して、ICTという用語を用いることはしない。

「なお、インターネットや携帯電話等の情報通信技術を表す英語としては「IT」と「ICT」があり、現在の我が国では「IT」の語が広く普及しているが、国際的には、欧州や中南米、アジアの各国及び国連をはじめとする各種国際機関において「ICT」の語が広く定着している。

総務省としては、これから実現を目指すユビキタスネット社会では、豊かなコミュニケーションが実現するという点が最も重要な概念であることを踏まえ、情報通信におけるコミュニケーションの重要性をより一層明確化するため、本文においては原則として「ICT」の語を使用している。」(http://www.johotsusintokei.soumu.go.jp/whitepaper/ja/h17/index.html ,2006/01/08)

2）2004年6月1日の佐世保での小六女児による同級生殺害。自殺サイトで知り合った同士の自殺、また、ますます巧妙になる振り込め詐欺、出会い系サイト。等など。

3）RFID（無線タグ）による児童保護の商品開発は、活発に行われている。

4）メールといえば、携帯メールのこと、というのがPTAのお母さんたちの使い方で、パソコン・メールのことなんてでてこないわよ、と妻に言われたのが3年ほど前である。

5）イントラネット（Intranet）：社会情報システムへのインターネット技術の適用。1996年からのインターネット化のキーワード。ブラウザを世に出したマーク・アンドリーセンが、インターネットに市場はない。企業内に市場はあると呼びかけた。

6）この意味で、インターネット革命は、二段階革命である。第一段階は、インターネット接続が可能になること。第二段階は、身体がネットに接続されること。政府が提唱するユビキタス化は、第二段階を、システムの側から推し進めようとしている。つまり、ネットに接続された身体を、情報処理する対象として徹底的に客体化する動きである。これに対して、コミュニケーションの環境としてネット環境を活用するのであれば、関係の対称性を維持しうるシステムを構築していかなくてはならない。この点については、稿をあらためて展開したい。

7）連続量的関係性と離散量的関係性と呼んでもいい。アナログとデジタルの比喩はこのように使える。文字盤で表示される時計をアナログ、数字で表示さえる時計をデジタル、という喩えを用いることがある。しかし、文字で表していようと、数字で表していようと、時計は、アナログな時間の流れを表示している。その意味では、デジタルを象徴する離散量の性格な喩えにはなっていない。離散量とは、隣の不連続性に象徴される。1分50秒の1秒隣りが、1分49秒と1分51秒である限り、これを長針と単針であらわそうと、数字の文字盤で表そうと、アナログ量である。それは、私達の経験する時間がアナログ量だからに他ならない。このことは、距離についてもいえる。1m先のものよりも、2m先にあるもののほうが遠い。しかし、デジタルでは、1m先のものよりお、100m先のものの方が、近い、ということが出現する。数学の、modulo計算による不連続性を参照されたい。この意味でこそ、身体に密着した電子デバイスは、空間をデジタル化したと言うことができる。

整数論をやるなかで、離散量にも規則性があることがわかるが（もちろんそうであるから抽象化して扱えるのであるが)、微分積分という解析学があつかう連続量とは別の感性がもとめられるように思う。1分50秒の隣が、突然3分23秒になるような時間の流れを私達は、考えることができない。時間は、連続量だからだ。いや、そのような連続した経験を時間と呼んでいる。しかし、離散量の世界では、不連続なことが起こる。ここにある不安は、突然、見も知らぬ人からメールが届く、見も知らぬ人が自分のWebを見に来る、ということに対応している。

8）子供に語りかけるのだよ。子供がなにか言ってきたら、絶対に無視してはいけないよ。ちゃんと返事するのだよ、ということを子育ての重要事項として母に伝授された。これは、子育ての経験の中で、こうした応答経験が社会性を形成する重要な要素なのだと理解されてきたからである。確かに、周囲が応答しない環境で育てられた子供は、応答のトレーニングが少なくなる。他者との応答関係密度が低くなることは確かであろう。

9）私の娘が試験期間中であるにもかかわらず携帯メールに頻繁に応答している姿をみて、まるで、皆で試験勉強の邪魔をしあっているみたいだと感じたことがあり、それをテーマに以下の投書を新聞に行った。

「携帯メールは集中力を奪う（声）

総務省の報告によれば、携帯電話の電磁波が記憶力に悪影響を与えることはないという。しかし私は、携帯電話・メールは１人だけの時間を侵食することで、すでに学習能力に悪影響を与えていると思っている。

子供の脳は、困難に直面した時、集中して考えることからいくらでも鍛えられる。集中する経験がなければその能力は獲得されず、この機会を携帯は奪う。今や「１人」の状態は努力しなければ手に入らない。

子供たちは、友達に礼を欠かないようにと、受信可能状態を維持し、着信後すぐに返事を書く。返事を書けば当然の返信を待つ。常に何かを気にしている中途半端な状態を脳に強いる。

返事がすぐになくても無視されているわけではないよね、と思う。しかし、相手もそう思う保証はない。日常的な礼儀感覚の延長で「すぐに返信しなくても失礼にはならない」というルールは現れてこない。

職場でも同様である。大人だってパソコンにメールが入れば読む。内容に応じて返事を後回しにする能力は自然には身につかず、強い意思が必要である。この能力は子供の時に形成するしかない。」（『朝日新聞』2002.11.11，朝刊,オピニオン２面）

この投書を行った時点では、実は、携帯メールが「声」の延長にあることに気づいていなかった。パソコンメールと同等に扱っている。しかし、本文で述べたとおり、パソコンメールが「書面」の延長であるのに対して、携帯メールは「声」の延長であること。着信は、対面での「挨拶」の延長になるのである。このことが、すぐに応答しなければ「礼を失する」という意識を生み出している。

10）メールの返事がいつまでもこないと、場合によっては、お叱りの電話が入ったりもする。こういう対応にも電子メールとはFAXの延長、双方向のFAX、という性格が付与されているのがわかる。

11）RFID（無線タグ）の発展は、インプラント（体内埋め込み）へと向かう。これは、生体を情報と一体化させることを意味している。携帯電話の常時所持とは、擬似的なインプラントであろう。人間を番号で管理する発想と同様、一方的に参照される身体を生み出すことになる。すでにメキシコの弁護士は、RFIDチップをインプラントされているというし（http://www1.voanews.com/article.cfm?objectID=555281FD-251D-4431-BDF647FCA7B058D5　2006.01.08)、米国の薬品会社も、インプラント用チップを商品化してい

る（http://japan.cnet.com/news/tech/story/0,2000047674,20062223,00.htm　2006.01.08）。

インプラントの状況を考えることは、電子メディアコミュニケーションを考える基本になっていく。RFIDの「問題点」といてプライバシーの侵害があげらえるが、これは、コミュニケーションが成立する関係性の変化（一方的な客体化）の現れであって、そのデバイスを使った場合の対称性の崩れをこそ問題にする必要がある。

■参考文献

赤田英博,2004,『平成16年度「家庭環境におけるテレビメディア調査／青少年とインターネットなどに関する調査」「教育改革についての保護者の意識調査」結果報告』,PTA全国協議会.（Web上に概要が公開されている。URLは、以下の通り：http://www.nippon-pta.or.jp/oshirase050520/子どもの心に影響を与える有害情報問題の取組み.pdf 2006.01.08）

Berger Peter,L,1963,"Invitation to Sociology: A Humanistic Perspective" Doubleday anchor Books,（=1995,水野節夫・村山研一『社会学への招待』新思索社）

Cassirer, Ernst, 1944, "AN ESSAY ON MAN", Yale University Press, New Haven.（= 1996, 宮崎音弥訳『人間――シンボルを操るもの』岩波書店）

藤本一男，2004,「電子書籍の可能性」『Gyros』#9，勉誠社出版，62-71

Giddens, Anthony ,1992, "The transformation of intimacy : sexuality, love and eroticism in modern societies", Polity Press,（=1995,松尾精文・松川昭子訳『親密性の変容――近代社会におけるセクシュアリティ、愛情、エロティシズム』而立書房.）

香山リカ・森健,2004,『ネット王子とケータイ姫』中央公論社

前田愛,1993,「音読から黙読へ」『近代読者の成立』岩波書店，167-210（初版は、1973,有精堂出版）

正高信男，2005,『考えないヒトーーケータイ依存で退化した日本人』中央公論社

森岡正博，[1993]2002,『意識通信』筑摩書房

小此木啓吾,2005,『ケータイ・ネット人間の精神分析』朝日新聞社

Sanders, Barry, 1994,"A is for ox : the collapse of literacy and the rise of violence in an electronic age", Vintage Books（=1998, 杉本卓訳『本が死ぬところ暴力が生まれる：電子メディア時代における人間性の崩壊』新曜社）

高見広春，2002,『バトルロワイヤル（上）（下）』幻冬舎.